

ナチュラルキス+<sup>plus</sup> 2  
*Keisbi & Saboko*

---

風  
*fuu*



エタニティ文庫

## C o n t e n t s

ナチュラルキス<sup>plus</sup> 2            5  
～ side Keishi ～

なによりもしあわせを……    303

ナチュラルキス  $\text{+}_{\text{plus}}$  2

～ side Keishi ～

## 1 驚きの訪問

バレンタインデーは終わったんじゃないのか？

化学室の隣にある、化学教諭専用の部屋のソファに座った佐原啓史は、胸の内、世間に苦々しく問いかけた。

だが実際、今日になってもまだドアの外にはチョコレートを持った女子生徒たちが集まっている。

腹が空いているせいで苛立ちが大きくなる。

ドアの前に彼女たちがいては、外にも出られず当然昼飯も手に入れられない。強硬突破しようと思えばもちろんできるが……その気力がまるでない。

結局は、空腹を受け入れるしかないのだ。

諦めのため息をついた啓史は、天井を見上げて昨日の出来事を振り返り、奥歯を噛み縮めた。

榎原沙帆子……

まさか、彼女の家が引越すことになるなんて……だが彼女は、残れるものならば一人暮らしをしても残りたいと思っている。その意志は固いようだった。なにせ、引越などしたくないと、彼の前で泣き出したくらいなのだから……

どうして残りたいのか？ 仲の良い友達と離れたくないから？  
もちろんそれもあるだろうが……

彼女は……同級生の広澤脩平ひろさわしゅうへいに好意を持っている。あいつと離れたくないから、引越しを嫌がっているのだ。

啓史は血が滲みそうなほど強く、唇を噛み縮めた。

胸がひりつく。そして、自分が胸をひりつかせている事実……吐き気がするほど怒りが湧く。

啓史は彼女への想いをずっと否定し続けていた。だが、そんなことは無意味だと受け入れたのが昨年暮れ……

彼女を愛していることを認め、それからずっと、手に入れることを望んできた。だが、いまの彼は教師という立場。そして彼女は、彼の教え子……

唐突に告白などしてもうまくゆくはずがないと、ずっと悶々とする気持ちを抱えていた。

それが昨日、破格のチャンスを得たのだ。

授業中気分が悪くなった沙帆子をこの部屋で休ませ、両親が遅い時間まで帰らないというので自分の家に連れ帰った。

そこまではよかったが、彼女が急に泣き出し、わけを聞くと、引越さなければならなくなったと言うのだ。

ようやく彼女との距離を縮められたと思っていたのに……

沙帆子は引越しを嫌がっていたし、もちろん彼自身も行かせたくなかったから、沙帆子の両親に、彼女をこちらに残してくれるよう頭を下げて頼んだ。

その結果、ふたりの仲を誤解されてしまい、沙帆子の両親は娘を残す条件として、啓史に結婚しろと言いつ出したのだ。もちろん驚いたが、彼にすれば願ってもない話で……目の前にぶら下がった餌えさに、彼は何も考えずに飛びついた。結婚は啓史ひとりの気持ちでどうこうできるものではない。沙帆子にもその気がなければ実現しないのに……そんな当たり前のことすらあときは頭になくて……

結局、彼はあの場で「沙帆子が好きだ」と叫んだようなもの。目も当てられないほどの大失態だ。

あー、馬鹿か俺は……

昨日の自分に対する強烈な怒りが、胸の中で爆発しそうになる。

啓史は目を瞑り、怒りを堪えた。

少し落ち着いたところでソファにもたれかかり、天井を見つめてふっと息を吐く。

これからどうするか……？

昨夜はふたりが付き合っていると思いつ込んでいた沙帆子の両親だが、当然、いまは彼女が真実を伝え、その誤解も解けてしまっているだろう。だいたい沙帆子は、他の男に気があるのだ。啓史と結婚なんて、彼女にすればとんでもない話だろう。

そういえば、昨日の帰りしな……あいつを脅したな……

バレンタインのチョコをくれたことを逆手にとつて、俺をからかったのかなんて口にしちまった。

……最悪だ。

啓史は前屈まがみになり、ため息をつきながらうなだれた。

彼女の両親にも、沙帆子にも、彼の気持ちはバレてしまつて……おかげで、これらが難しくなつた。啓史の気持ちガバレていなければ、彼女をこちらに残してほしいと頼むのも簡単だったのに……

学校長である伯父の家に下宿させると言えば、彼女の両親だって娘を残すことに同意してくれただけに違いないのだ。

もしかして、沙帆子が俺の脅しに屈して、まだ真実を話していないなんてことは？

そう考えた啓史は苦笑した。甘すぎる考えだな……

どうして、沙帆子の携帯番号を聞かなかったのだろうか？ 聞いてさえいれば……どう  
いう状況になっているか、知ることができたのに……

あいつ……俺の気持ちを知って……やっぱり、避けようとするだろうか？

このままうやむやにはしておけないと、彼女からやってくるようなことは？

ない……か？

飯にやってきたとしても、彼の部屋の前にいる女子生徒たちの群れを見たら、彼女の  
性格なら、即座に後戻りしてしまうだろう。

啓史は首をめぐらし、ドアを覗みつけた。部屋の中にあることがバレないように、音  
ひとつたてられないこの状況……

むかつく……

不意に、コツコツと窓を軽く叩く音がし、啓史は最悪の事態を想定して振り返った。

窓の外にあった姿が、彼が振り向いた直後、消えた。

啓史は眉をひそめた。いま、見たものは……？ 沙帆子だったような気がするが、見  
間違いだらうか？

悶々もんもんと彼女のことを考えていたから？ いや、違う。見間違いなどでは……

啓史は、音を立てないように立ち上がり、窓に歩み寄った。緊張し、鼓動が速まる。  
息をひとつ吐いた啓史は、音を立てないように窓を開けると、下を覗き込んだ。

壁にへばりつくようにして、しゃがみこんでいる人物。やはり沙帆子だ……

彼の胸の中で、純粹な喜びが膨らんだ。

彼女は丸くなるようにしゃがみこんだまま、固まってしまっている。窓が開けられた  
のはわかっただろうに、顔を上げる気はないようだ。こちらから声をかけるべきだろう。  
「ここで何やってる？」

啓史は、窓の外に身を乗り出して、後頭部に向かって小声で問いかける。

沙帆子が、恐る恐るという感じで顔を上げた。

それにしても、こいつはどこからやってきたのだろうか？

この校舎は完全に垣根に囲まれているから、外からは入り込めないはずなのに……  
一ヶ所ドアがあるにはあるのだが、鍵がかかっている、生徒たちは出入りできない。

「お話ししたいことがありますよ」

おずおずと沙帆子が切り出してきて、啓史は気を引きしめた。

話したいことは、もちろん昨日のことだろう。両親の誤解がとけ、馬鹿馬鹿しい結  
婚話が消滅したという報告に違いない。

だが、内容はともかく、沙帆子がこうして会いに来てくれたのだ。ここはチャンスと  
捉とらえるべきだろう。

そう考えた啓史は、急にさきほどから悩まされていた空腹を思い出した。ポケットを

まさぐり、財布を取り出す。聞きたくもない報告より、この空腹をなんとかしたい。  
千円札を抜き取った啓史は、無言で沙帆子に差し出した。当然、沙帆子はきよとんと  
している。

「へっ？ あのこと……」

「パン、買ってこい。二つか、三つ。あとペットボトルのお茶」

啓史は囁くように彼女に命じた。

「パ、パンと、お茶？」

素<sup>す</sup>頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な顔というのは、こういう表情なのかもしれない。沙帆子のちよつとまぬけ  
な戸惑い顔を見て、笑いが込み上げてきたが、ぐっと堪<sup>こ</sup>えた。

「ハンバーガーとか、コロツケパンがいいが、なければなんでもいい。早くしろよ、時  
間がないんだからな」

傲慢な命令口調に反抗できなかったのか、納得できない様子ながらも、彼女は千円札  
を手に垣根へと向かった。いったいどうするつもりなのかと見ていたら、突然しゃがみ  
こんで四つんばいになり、垣根の中に潜り込んでゆく。この角度からはわからないが、  
どうもその部分に穴があるようだ。魔術のように姿を消した沙帆子に、啓史は狐につま  
まれた気分になった。

……あいつ、いまここにいたよな？

啓史は手にしている財布の中身を確かめ、確かに千円札が一枚消えているのを確認し  
て、唇を突き出した。

どうやら……現実と思っているらしい。

## 2 懐柔<sup>かいじゆう</sup>の決意

沙帆子にパンを買いに行かせたのは自分なのに、戻りを待っている時間がどうにも長  
く感じられ、啓史はだんだん苛<sup>いら</sup>ついてきた。

嫌な話を先延ばしにしたいばかりに、せっかくなってきた彼女を……

馬鹿か俺は……

嫌なことはさっさと済ませて、一からやり直さないといけないのに、昼休みは刻々と  
過ぎてゆく。

苛立ち始めた自分を、啓史はなんとかなだめようとした。

腹が減っているからだ。何か口にして腹を満たせば、いい考えも浮かぶだろう。空腹  
で苛立ったまま彼女と話しても、いい結果を生み出せるはずがない。

だろ？

沙帆子を見送ったときのままの姿勢で、己と問答していた啓史は、視界に何か動くものを捉えて意識を向けた。

小さな頭が見え、上半身が出てきて、全身が現れた。安堵と喜びが湧いた。

垣根を潜り抜け、立ち上がった彼女は、全力疾走してきたのか、ずいぶんと荒い息をつきながら近づいてくる。彼女と目を合わせた啓史は、口到人差し指を当てて静かにするように伝え、手を差し出した。沙帆子を部屋に入れるつもりで手を差し伸べたのだが、彼女は買ってきたものとおつりを申し訳なさそうに手渡してきた。

「あの、頼まれたもの、なかったんです。すみません」

小さな声で詫げる彼女に、啓史はまた手を差し出した。

彼女はひどく驚いたようで「え？」と叫ぶ。

「入ってこい」

彼の言葉に沙帆子は身を硬くしたが、それでも啓史の手を掴み、窓をよじ登って窓枠に立った。

啓史は音を立てないように気を配りながら、沙帆子の身体を抱え、部屋の中に入れた。その気になれば、即座に抱きしめられる距離に、甘い誘惑を感じる。もちろん、行動に移すべきではないことはわかっている。

「物音を立てるなよ。……ソファに座れ」

沙帆子の耳に口を寄せて囁くと、彼女はおもちゃみたいにくくくくと頷く。

啓史の視線は、目の前にある沙帆子の桃色の耳たぶに引き寄せられた。口に含んでみたい……そんなことを本気で考えている自分に、啓史はどきりとした。

そんな彼の心情も知らず、沙帆子はぎこちない歩みでソファへと移動し、座り込んだ。自分がさっきまで座っていた場所に、沙帆子が座っている。

奇妙な感覚に囚われた。空を飛んでいる鳥を捕らえ、籠に閉じ込めたような……充足感……

啓史はゆつくりと息を吸って自分を落ち着かせ、彼女に歩み寄った。沙帆子を腕の中に閉じ込めたがる自分を危うく思いながら、ソファに片手をつき、彼女の耳に唇を寄せる。沙帆子から立ち上る微かな甘い香りが欲望をくすぐる。

「まじいな。タガが外れかかっている。」

「コーヒー飲むか？」

沙帆子はこくりと頷いた。彼女のほうへ屈み込んでいた啓史はゆつくりと身を起こし、机に歩み寄る。

抱くべきではない感情に囚われすぎている。落ち着くべきだな。

それにしても、昨日は彼女とふたりきりでも、こんな風に欲望に駆られたりはしなかつ

たのに……なぜいま？

どうして冷静でいられない……？

カップにインスタントコーヒーを入れ、砂糖を手取る。今日はミルクもある。昨日、榎原家からの帰り道、コンビニに寄って調達したのだ。昨日のことについて話をしよう  
と、彼女をここに呼び出すつもりで……まさか彼女のほうから来てくれるとは……

砂糖をどのくらい入れればいいのか沙帆子に尋ねようかと思ったが、なんとなく口に出せなかった。そんなことを聞いたら、彼女のためにわざわざ砂糖を用意したのが、まるわかりだ。

そこまで考えて、啓史は顔を歪めた。

すでにこいつは、俺が自分のことを好きだと、わかっているはずだ。

いまさらだな……隠す必要もないさ……

沙帆子のコーヒーに砂糖とミルクを入れ、スプーンでかき混ぜながら、啓史はそっと息を吐き出した。

ふたつのカップを手に振り返ると、沙帆子がいくぶん慌てたように顔を伏せた。

こいつ、俺のこと見てたのか？

そう思うと、背中あたりがむずむずしてきた。もちろん、悪い気はしなかったが、気恥ずかしい。

カップを沙帆子に手渡すと、啓史はわざと密着するように彼女の隣に座り込んだ。

もともとそんなに大きなソファではないから、さほど不自然ではないはずだが……

啓史は沙帆子の反応を窺<sup>うかが</sup>おうとして、彼女の顔をそっと覗き込む。

なんだか、がちがちに緊張しているように見えた。

身体が触れ合っているのを意識しているのか？ それとも、どう話を切り出そうかと悩んでいるのだろうか？

結婚の話が消えたことは、間違いない。

俺を少しでも傷つけないように、言葉を探しているのかもしれないな。

コーヒーを一口飲んだ沙帆子が、驚きの表情で彼を見上げてきた。きつと砂糖とミルクが入っていることに驚いたんだろう。だが、彼女は何も言わぬまま、ただ見つめてくる。沙帆子と目を合わせていられず、啓史は先に目を逸<sup>そ</sup>らした。

コーヒーを一口啜<sup>す</sup>った啓史は、沙帆子を買ってきたジャムパンを掴んだ。ビニール袋が音を立てる。彼は眉をひそめると、音を最小限にと苦慮しながら袋からパンを取り出した。腹は最大値まで減っていたが、半分に分ったパンの中から真っ赤なジャムが現れた途端、食欲は急激に低下した。

「あの？」

沙帆子の呼びかけに啓史はびくりとした。とうとう話を切り出そうというのだろうか。

聞きたくない話を聞かされることに怯ひるんでいる自分が苦々しい。啓史は自覚なく、鋭い目を沙帆子に向けていた。

彼女は、何か言おうとして開けていた口をパクンと閉じる。苛立つた啓史は、沙帆子にぐっと顔を近づけた。

「なんだ？」

「あ、あの。お砂糖とミルク」

そう言っつて、自分の持つているカップを指さしてみせる。

「ああ」

なんだ、そっちか……

気が抜けた啓史は、視線をパンのジャムに戻した。憎いのは、ジャムよりも、この自分。だんだん大きくなっていくムカツキを、そもその原因である沙帆子に向けたくなくてくる。

そういうえば……こいつ。甘いもん、好きだよな。

いつの間にか、啓史は半分に分かれたパンを彼女の前に突き出していった。

この甘いジャムだけ、処理してくれないものだろうか？

切実な願いだったが、さすがに無茶だろう。

そう思い直したとき、沙帆子が口を開けた。こともあろうに、彼のパンをかじろうと

している。

啓史は咄ちや嗟にパンを引いた。獲物を捕らえそこねた彼女の歯が、カチンと鳴る。

こいつ、俺のパンを断りもなく食おうとしゃがるとは……

「舐めろ」

啓史は思わずそう言っていた。

彼女はひどく驚いた顔になった。問うような色が瞳に浮かんでいたが、啓史は無視することにした。

「ジャムだけだ。全部舐めろ」

「ど、どうして？」

どうして？

啓史は顔をぐっと近づけた。驚いた彼女が身を引いたことにむっとした啓史は、さらに顔を近づける。

「嫌いだからに決まってるだろ。だが、ジャムを舐めるだけだぞ。パンは食うなよ。俺の食う分がなくなる」

「あうっ」

彼女は奇妙な声を上げパンを受け取ったが、そのパンをじっと見つめるばかりだ。

「おい、早くしろよ。昼が過ぎちまうだろ」

「は、は、はいっ」

声を潜めながらも理不尽に怒鳴りつけたのが功を奏したのか、彼女はやっとジャムを舐め始めた。啓史はジャムのなくなったパンを取り上げると、すぐに頬張る。今日初めての食事としては、なんとも佻<sup>たわぶ</sup>しい品なのだが、うまかった。さらにアンパンの餡とチョコパンのチョコも舐めさせる。

自身のなくなったパンをコーヒを飲みながら夢中でパクついていると、あっという間になくなってしまう。満ち足りたとはいえなかったが、それでも空腹感はなくなった。コーヒを飲み終えて時計に目をやると、まもなく昼休みも終わる時間だ。沙帆子を見てみると、コーヒークップに口をつけたまま、どこかぼうつとした表情をしている。啓史は、沙帆子の耳に唇を近づけた。

「榎原、そろそろ時間だぞ」

啓史は囁<sup>ささや</sup>くように言ったが、目は彼女の耳たぶに釘付けになっていた。ほんの少し近づければ、彼女の耳に唇で触れられる。そう考えた瞬間、彼の唇は沙帆子の耳に触れていた。微<sup>かす</sup>かな接触に、とくとんと心臓が跳ねる。すつと顔を引き、彼女の様子を窺<sup>うかが</sup>ったが、まるきり反応がない。

なんだ？ 気づかなかったのか？

面白くない……

「榎原、俺の声、聞こえてるか？」

啓史は少し棘<sup>とげ</sup>のある声で話しかけた。

視線が動き、彼女はようやく啓史と目を合わせたが、まだ反応らしい反応はない。

もしかして……

「甘いもんばかり食べすぎて、こいつ……壊れたか？」

もうすぐ午後の授業が始まるし、さすがにこれ以上ここに留めてはおけない。

啓史はもう一度時間を確かめ、立ち上がるとドアに歩み寄って耳を澄ませた。

物音はしないが……いるかいけないか、はつきりとはわからない。

啓史は足音を立てないようにゆっくりと戻り、前屈<sup>まえかが</sup>みになって、ソファに座って自分をじっと見つめている沙帆子の耳元に顔を近づけた。

「お前、窓から帰れ」

そう囁<sup>ささや</sup>くように言うのと彼女を抱え上げ、そのまま窓へと向かって窓枠に掛けてやった。

啓史に抱え上げられて、彼女は驚いたようだが、何も言っではこなかった。

「気をつけて下りろよ」

外に下ろそうとする啓史に対して、彼女はなぜか強く抵抗し、踏ん張ったまま下りようとしな

「で、でも先生、お話がまだ」

「ああ……」

話か……そういえばそうだった。

「そう言ってたな。放課後また来い」

「ま、また窓からですか？」

不<sup>みじ</sup>服と惨<sup>みじ</sup>めさの混じった声に、啓史は笑いを堪<sup>こら</sup>えた。

来る方法に文句はあるようだが、啓史のところに来ることに異論はないようだ。

「ああ。そのほうがいい」

啓史はそう言くと、彼女を外に下ろした。

「気をつけてな」

窓の外に下りた彼女は、「は……はい」と頷き、すぐに垣根の中に潜り込んでいった。ずいぶんという専用通路を見つけたもんだ。

放課後も来ると約束したし……またふたりきりの時間が持てるわけか。

口元がほころびそうになったが、そう喜んでもいられない。昨夜、あれからどうなったのか。しっかりと話を聞かなければ……これからのことについても、話す必要があるし……

考え込んでいるところに、垣根のほうに動くものを捉<sup>とら</sup>え、啓史は眉を寄せた。なんとさきほど消えたはずの沙帆子の身体が垣根から出てきたのだ。後ろ向きのまま戻ってこようとしているものだから、やたら手間取っている。

ずいぶんと見甲斐のある光景に啓史は笑いを堪<sup>こら</sup>えた。ようやく四つん這いだった彼女が身を起こし、こちらを振り返ってくる。ふたりの目が合った途端、沙帆子はむうっとした顔で、睨みつけてきた。こうなると、彼女が何をしてもおかしい。

派手に吹き出した啓史のところに、沙帆子は戻ってきた。いったい何をしに戻ってきたのかと思ったら、「白とピンク、どっちが好きですか？」と不<sup>ふ</sup>服そうに問う。質問の意味がまるで理解できず、啓史は眉を上げた。

「白とピンク？ どっちも……」

「どうも」

返事の途中で、なぜか沙帆子はそう言い捨て、また穴に戻って行って……消えた。

啓史は垣根の一点を見つめ、首を傾げた。

いったいなんだったんだ？

わざわざ戻ってきて、白とピンク？ それも最後まで返事も聞かずに……

腑<sup>ふ</sup>に落ちなかったが、彼女は放課後またやってくるはずだ。その時に聞けばいいだろう。

啓史は窓を閉め、背を向けると、そのままそこにもたれて腕を組んだ。

テーブルの上には、沙帆子の使ったコーヒーカップがある。

あいつ、かなり押しに弱いよな？

相手の意思を無視して、無理やりなんてことをするつもりは、もちろんないが……  
 ちよつとばかし強引に進めてゆけば、啓史の思惑どおりにいくんじゃないだろうか？  
 そうこうしながら、ふたりの時間を重ねてゆけば……懐柔するの、思ったよりた  
 やすいかもしれない。

自分の甘すぎる策略を啓史は鼻で笑ったが、やがて笑みを消して真顔になった。  
 少しでもやる価値があると思えるなら、なんでもやってみよう。

なによりもまず、啓史を教師ではなく、男として意識させることが必要だ。

### 3 心の問いかけ

明日の授業の準備を終えた啓史は、凝った身体をほぐすために、大きく伸びをした。  
 コーヒーでも飲むか？ 研究課題にも手をつけたいが……  
 とここで……いま何時だろう？

腕時計に目をおとした啓史は、眉を上げた。

思ったより時間が過ぎていて、すでに放課後になっている。啓史はバツと後方にある  
 窓を振り向いた。

もしかして、沙帆子が来ているのではないかと思ったが、そこに彼女の姿はない。立  
 ち上がって窓に向かおうとした啓史は、ドアの外から聞こえてきた声に、ぴたりと動き  
 を止めた。

まさか、また？

ドアに近づき耳を寄せて窺うと、やはり複数の女子生徒がいるようだ。

啓史は舌打ちしそうになるのを、ぐっと我慢した。

コンコンとドアがノックされたが、もちろん返事などしない。

「やっぱ、いないのかな、佐原先生……」

「けど職員室にはいなかったじゃん。だとしたら、この部屋にいるのかも」

「でも返事ないし……。あーあ、せっかくのチョコ……無駄になっちゃったなあ」

「でもさ、結局、誰も受け取ってもらえなかったみたいだよ」

「やっぱ、佐原先生に彼女がいるって噂、ほんとなのかな？」

「ねえ、ちよつとあんた声大きいよ。先生が中にいたら、聞かれちゃってるんだよ」

少しの間、静まり返ったが、また話し声が聞こえ始めた。

「バケ子先生って噂……信じる？」

バケ子先生という言葉に拒否反応を起こし、啓史は顔を歪めた。生徒たちにバケ子と  
 あだ名されているのは、化粧の濃い女性教諭のことだ。この教諭には、これまで散々嫌

な目に遭わされている。

「あんだねえ、それだけはないよ。佐原先生が、あんなケバイ女、相手にするはずないって」  
「だよねえ」

俺に彼女がいるという噂が流れてるのか？ それならそれで都合がいい。

「ねえ、もう行く？」

「うーん、だねえ」

どうやら、帰る気になってくれたらしい。

遠ざかってゆく足音を耳にして、啓史はほっとした。

窓に歩み寄り、ゆっくりと開ける。外の空気は多少冷たいが、寒さに震えるほどではない。開けておけば、彼女がやってきたらすぐに気づけるだろう。

彼女の専用通路のあたりをじっと見つめていた啓史は、そんな自分に気づいて眉をひそめた。

なんで俺はこんなに期待しているんだ！

啓史はくりりと後ろを向くと、口をへの字にまげて無意識にポケットをまさぐった。

白衣のポケットの、右、左、そしてズボンの片方のポケットに手を入れたところで、啓史は我に返った。

何やってる？ タバコなんて、どこにもないぞ！

くそっ！

苛立つて髪をかきむしった啓史は、垣根の向こう側から人が走ってくる足音が近づいてくるのに気づいた。

やっと来たか……

「あ……れ？ 江藤さん」

男の声だ。啓史は眉をひそめた。いまの声は、聞き覚えがある。それに江藤とは……まさか……：沙帆子と仲のいい江藤詩織か？

「広澤君」

やはり江藤だ。それに男の声は、間違いなく広澤……

こいつは、沙帆子が好意を寄せている男。そして、沙帆子がバレンタインデーのチョコを渡そうとしていた相手。もしも昨日、啓史が沙帆子からチョコを取り上げなかったら、チョコはこいつの手に渡り、ふたりは付き合い始めていたはず。胸にじわりと嫉妬の感情が湧き、啓史は口元を引き締めた。

「どうして……君が？」

「う、うん。沙帆子の代理。ごめん」

沙帆子の代理？ ……いつたいたいということだ？

「そっか。つまり……そっか」

「あ、あの……広澤君、あのさあ」

「振られて慰めなんでもらいたくない。……江藤さん、もういいよ。それじゃ振られた……？ それは、沙帆子について……か？」

「あ、あのだからさ。広澤君」「何？」

「そんな簡単に、諦めちゃうことないと思うんだ。いっそのこと、面と向かって告白しちゃったらどうか？」

「で、玉砕しろって？」

「ううん、そういうんじゃない……ただ、わたしの経験から言わせてもらおうとね。わたし、いまの彼氏、別に好きってわけじゃなかったけど、告られて付き合い出したんだ。……沙帆子は、まだ男のひとと付き合った経験ってないからさ」

啓史は、目の前の垣根を睨みつけたまま、会話の内容を理解しようとした。

どうやら広澤は、ここに沙帆子呼び出したらしい。だが、あいつは江藤を代理で寄越した。

あいつ、もしかして、自分で来たかったのに、来れなかったのではないだろうか？ 呼び出されたところが、こともあるうにこの部屋の前で、会話が俺に筒抜けになるのを危惧して……

「相手のこといいなとかって思っても、そう簡単にオツケーしたりしないと思うわけ」

江藤の言葉に、啓史は憮然とした。

広澤のことを沙帆子がいいなと思ってるのは、本当だ。

怒りとやるせなさに歯を食い縛った啓史は、視界の端に動くものを捉えて、さっと目を向けた。

こ、こいつ！

いつからそこにいたのか、沙帆子が校舎の壁にくっつくようにしてしゃがみこみながら、よたよたと前進してくる。

啓史は顔を引きつらせた。驚かせやがって……

こいつときたら、なんだって、こんな突拍子もないところからばかり、現れやがる。

「それにね、沙帆子、本気で広澤君にチョコあげる気になってたんだよ。だからさ、自信持って」

大きな声で江藤が言った。その言葉は、啓史のハートを的確に刺した。

本気で、チョコをあげる気だった？

啓史は、いまだ自分に気づいていない沙帆子を、怒りに駆られて冷たく見据えた。

直後、江藤が広澤の肩でも叩いたのか、バシンという音が聞こえ、それにびっくりしたらしい沙帆子が顔を上げた。その瞬間、彼女は啓史に気づいた。そして、ぎよつとし

た顔で固まる。

「それってほんと？」

期待を含んだ広澤の声に、苦いものが込み上げる。啓史は沙帆子を見据えたまま拳を固めた。

「うん。ほんとだよ」

江藤の明るい返事。しゃがんでいる沙帆子は、精神的打撃を受けたように、少しよるめいた。

この野郎！ 精神的打撃を受けたのは、こっちだってんだ。ぜってえ、ただじゃおかねえぞ。

啓史は沙帆子に向けて手を突き出し、こっちにこいとぐいっと上げた。怯えた小動物のように、彼女は小刻みに首を左右に振って拒否する。啓史は憤りもあらわに、もう一度同じ命令を繰り返した。諦めたのか、沙帆子は泣きそうな顔で屈んだまま前進してくる。

江藤と広澤のほうは話が終わってこの場から離れたらしく、すでに気配はない。ようやく目の前にやってきた彼女に両手を差し出し、啓史は部屋に入れた。

広澤の存在が、啓史に痛みを与える。

啓史は、自分の腕の中にいる沙帆子の頭のとっぺんを見つめた。

広澤が好きなのか？

絶対に答えをもらいたくない質問が、胸の内で出口を探して暴れている。

啓史は自分をなだめた。

お前はもともと、あのチヨコが、広澤のために用意されたものだとは知っていたじゃないか。

彼女は広澤に渡さなかった。渡すチャンスはいくらでもあったはずだ。でも、渡さなかった。

それは、迷いがあったからじゃないのか？

そして、そのチヨコは啓史の手に転がり込んできた。

いまはまだ広澤のほうが優位かもしれない。だが、すぐに逆転してやる。

啓史は手を伸ばし、右手で窓を閉めた。

「あ、の……」

沙帆子の眩きを無視して、啓史は両手を窓につき、彼女の頭を挟むような姿勢で、顔を近づけた。

「あ……あのお」

お前は、俺のことを好きになるんだ！ 必ずそうさせてやる！

おどおどと見返してくる彼女を見つめ、啓史は心の中で宣言した。まるで啓史の心の声が聞こえたかのように、彼女の頬が赤く染まっていく。

彼女の変化を見つめながら、啓史は口を開いた。  
「納得のいく弁明、できるんだろうな？」

「え？」

ぽかんとした表情と声に、啓史はカチンときた。

「こっちは嫉妬に駆られているというのに……：……：……の野郎！」

「弁明だ、弁明」

啓史に凄まれた沙帆子は、なぜか拗ねたような目になって、彼を見上げてきた。  
やたら可愛いのが、こんなもんじゃ、いまの強烈な苛立ちには消えない。

「おい」

「あ、あれは……：……：……違うんです」

「違う？」

「ですから、その……：……：……断ってきても、詩織に頼んだんです」

「ほお、俺には、煽<sup>あお</sup>つてたとしか思えなかつたが？」

沙帆子は、啓史の視線から逃れるように顔を伏せる。その仕草にムカツキがさらに煽られる。顎に指をかけて顔を上げさせ、啓史は彼女の瞳を覗き込んだ。ふたりの身体は触れそうなほど近く、顎には彼の指がかかっているが、沙帆子に嫌がっている気配はない。

「お前……：……」

俺のこと、嫌いじゃないよな？

啓史は彼女のふつくらとやわらかそうな唇を、じっと見つめた。

いまなら、ふたりの唇を重ねるのは、たやすい……

それを望んでやまない自分を、彼は抑え込んだ。浅はかなことをして、後悔したくない。

「コーヒー、飲むか？」

彼女は頬を染めたまま返事をしない。近すぎるこの距離に、どうしていいかわからなくなっているのだろうか？

それとも、彼がキスを望んでいることに、感づいたか？

……やりすぎちゃいけないよな？ 不安が湧き、啓史は眉を寄せた。

「コーヒーだ。飲むのか？」

今度は沙帆子が頷いてくれたので、啓史はほっとした。

コーヒーを手渡し、彼女の隣に座り込む。しばらくコーヒーを啜<sup>すす</sup>りながら、沙帆子が話を切り出すのを待ったが、彼女は黙り込んだままだ。しびれを切らした啓史は、仕方なしに話を促<sup>うなが</sup>した。

「それで、用はなんだ？」

「あ……：……」

言いくそうに口ごもられ、啓史は息を止めた。彼女が言うことは、すでにわかっ

いる。

「はい。先生の電話番号を教えていただくこと……」  
は？

啓史は一瞬ぼかんとした。

こいつ、いまなんて？ 電話番号？

あまりに意外な言葉に、沙帆子の横顔を穴が開きそうなほど見つめてしまう。沙帆子がちらりと視線を向けてきた。ふたりの目が合った瞬間、啓史は「そうか」と反射的に口にしていった。

「こ、これから必要になるから母が教えてくれて……」

これから必要……それって……どういうことだ？

俯うつむいている沙帆子の横顔は、ひどく気まずそうに見える。

これから必要？ それって、なんに対しての……まさか……結婚？

啓史は頬を引きつらせた。

ま、まさか……だよな？

#### 4 自分への落胆

「携帯だせ」

頭の中は、混乱気味だったが、啓史は沙帆子に手を差し出した。

彼女は素直に携帯を取り出し、彼の手の平に載せる。

手の上にある沙帆子の携帯をまじまじと見つめたあと、啓史はそれを開き、自分の番号を押した。

彼の携帯が胸元で振動する。自分の携帯を取り出しつつ、彼は沙帆子に携帯を返した。携帯のディスプレイに彼女の携帯からの着信が表示されているのを確認した途端、それまでおとなしかった心臓が急に鼓動を速めた。ちらりと彼女を窺うかがうと、沙帆子も彼の番号を登録しようとしている。

啓史は沙帆子の携帯のディスプレイを覗き込みながら、「啓史」と、自分の名を口にした。「俺の名前だ。知ってたか？」

「し、知っていますた」

「ますた？」

啓史は、彼女の口にした言葉を思わず繰り返していた。別からかおうと思ったわけではなく、おかしな言葉に反応したにすぎなかったのだが、沙帆子を見ると、気まずうに頬を染めている。いや、少しむっとしてもいるか……

「し、知ってます。漢字だって……ほらこれ？」  
 確かに、彼女の携帯のディスプレイには、啓史のフルネームが正しく表示されていた。  
 「ふん」

嬉しさを言葉に滲にじませないように、啓史はそっけなく言った。

「あの。先生？」

「うん？」

「わたしたち……」

言葉に困っている沙帆子の様子に、啓史は居心地が悪くなった。

言いたいことがあるなら、さっさと言えばいいのに……

だが、これから電話番号が必要になるというのは……いったいどういう意味なのだ？ 結婚の話は、なかったことになりましたと、言いに来たんじゃないのか？ まさか、本当にまだ……

啓史は、ありもしないタバコを探してポケットを探っている自分に気づき、動きを止めた。そして、自分を見つめている沙帆子に顔を向ける。

結婚の話はどうなった？

そう聞くつもりだったのに、口から出た言葉はまったく違うものだった。

「ゲーム、やりに来るか？」

「え？」

沙帆子はきよとした顔で、啓史を見つめ返してきた。

彼女の反応も当然だろう、あまりに唐突な誘いだ。だが、いまさら取り消せない。

「週末」

唐突すぎたが、これでもし、彼女が遊びに来れば、ふたりきりの時間を過ごせる。またゲームをやらなないと、さりげなく付け足そうとしたが、沙帆子が「あ……」と声を上げ、啓史はその言葉を口にできなかった。沙帆子は、ひどく困った顔をしている。

「それが、その……」

沙帆子は俯うつむき、「ですね」と続ける。

「用事があるってのか？」

失望が胸に広がり、言葉が無意識のうちにとげとげしくなった。

そうそううまくゆかないよな。冷静に考えればそう思うのに、断られた落胆から、苛立つてきてしまう。

「えっと。よ、用事とかそんなのじゃなくて……ですね」

その言葉に、腹立ちはさらに膨れ上がる。

「それじゃないだ？」

ただ、俺んところには来たくないってのか？

彼の声の大きさに驚いたらしい彼女は、両手で彼の口を覆ってきた。

「せ、先生、声大きいです」

啓史は自分を落ち着かせようと息を吸い、目を閉じてソファにもたれた。

「そ、外にいるひとに、聞こえたんじゃないでしょうか？」

彼の耳に口を寄せるようにして、彼女は不安の色を滲ませた声で言う。

いまの、このふたりの距離に、啓史はたまらないもどかしさを感じた。

彼の誘いを断つたくせに、どうしてこれほどくっついてくるのだろう。

彼女をソファに押し倒してめっちゃくちゃにしてやるうかなんて、どす黒い感情が湧き

上がってくる。だが、そんなことをしたら、何もかも終わりだぞ。

自分自身から警告され、啓史の苛立ちはさらに増した。

「どうせここにいることは知られてるんだ。電話でもしてると思ってるさ」

彼は時間を確かめ、ドアに視線を向けた。

いないのを確かめたわけではないから、いるのかもしれないが……

「もういないかもしれないしな」

自分の言葉が鋭くなっていることに、さらにムカツキが増す。これじゃまるで、思うようにいかず駄々をこねるガキみたいじゃねえか。

「お前、用事終わったんだろ。もう帰れば」

自分でもずいぶん意地の悪い言い方をしたと思った。

大失敗だ。これからのために、もっとうまくやらなければならないのに……

何やってんだ……俺は……

彼女が立ち上がり窓に歩み寄ったのを見て、啓史は焦りを感じた。このまま帰してしまおうわけには……。けれど、腹立たしさはまだ彼の胸に巣食っていて素直になれない。このまま行かせたくはないのに、引き止めるための口実など思いつかないし、たとえ思いつけたとしても、口にできそうになかった。

啓史はため息をついた。

自分がかっかりだ。

彼は諦めて立ち上がった。

「榎原」

沙帆子は返事をしなかった。身を強張らせ、俯いてしまっている。彼女は、自分ひとりではこの窓枠に登れないから、まだここにいるにすぎないのだ。

啓史は仕方なく彼女の腰に手を当て、外に出るのを手伝った。窓枠に足をかけた途端、

彼の手を振り切るように、沙帆子はジャンプして外へと飛び下りた。

「お、おい」

彼の呼びかけなど無視して、彼女は垣根の中に潜り込み、あつという間に視界から消える。

これ以上ないほどの悔いを感じた。自分の愚かしさに呆れてならない。もどかしさと虚しさに、胸が蝕まれる。

啓史は、長いことそのまま立ち尽くしていた。

## 5 皮肉風味のやわらかい問いかけ

啓史は肩を落とし、ソファに仰向けにひっくり返った。

胸の中は落胆で埋まっていた。どうしてもっとうまくやれないのかと、自分をなじりたくなる。

せつかく神がくれた、ありえないほどのチャンスだったのに、お前は苛立ちに駆られて何もかもふいにするつもりか？

啓史はいま自分が横になっているソファに目を向けた。……ほんのいましがたまで、

ここに沙帆子が座っていたのだ。

誘いを断られたくらいで拗ねて、何もかもを駄目にするなんて、あまりに愚かしいぞ！ 彼はむっくりと起き上がり、気持ちをリセットしようと、息を吐き出した。

どうするか？

顎に手を当てて考え込んだ啓史は、ふと眉間を寄せた。

そういうえば……結婚の話……いつたいどうなったんだ？

なかったことになったんだろ？ もちろん？

目を細めながら、沙帆子の口にした言葉を思い返す。

電話番号を聞いてきて……これから必要になるとか……言ったよな？

これから必要に……？

それって……

信じられないことだが、どうやらまだ、結婚の話は立ち消えになっていないということとなんじやないか？

啓史は思わず自分の頬をぎゅっと抓つかっていた。

痛いよな……ちゃんと……

けど……なんでだ？

つまり……あいつ、引越越こするぐらいなら、俺と結婚するほうがいいってことか？

啓史は顔をしかめた。

あいつ、何考えてんだ？俺が、引つ越さずにすむように手を貸すと言ったから……これから何かうまい作戦があるとでも思ってるのか？

沙帆子のほわほわした顔を思い浮かべた啓史は、引きつった笑いを漏らした。  
あるかもしれん……

だとしたら、俺はどうすりゃいいんだ……？

このチャンスをと、とことん利用するべきか？

さすがに結婚はないぞと、沙帆子に言うべきか？

だが、そうなると、どうなる？

そうなったとしたら、正攻法で一からやり直すだけだろう。

つまり、結婚話はなくなり、はじめに戻って、彼女をここに残してほしいと改めて両親を説得する……か。

それが一番良さそうだった。このまま結婚話を進めてゆけば、いずれ彼女は現実を受け止めきれなくなって逃げ出すに違いない。やはり、手堅くいくしかない……それが一番だろう。

結論を出した啓史は、携帯を手にして、じっと見つめた。

あいつ、まだ怒ってるんだろうな……

電話してみるか？いまはまだ電車の中だろうから、家に着いた頃、電話してみよう。

それにしてもあの野郎、週末、なんの用事があるってんだ。

いや、待てよ。用事とかじゃないとか、言っていないかったか？

それって、ただ、俺んとこに来たくないってことで……つまり……俺とふたりきりになりたくない？

啓史は心の底から落ち込んだ。

しばし落ち込んでいた啓史は立ち上がり、気分直しにコーヒーを飲むことにした。

机に寄りかかってコーヒーを飲んでいた彼は、思いついて机の引き出しを開ける。

昨日、沙帆子から取り上げたチョコの包み……

今朝、白衣から取り出したものの、どう処理していいか困ってここに放り込んだのだ。啓史は綺麗にラッピングされた箱を掴み出したが、急に憤りに駆られて机の上に投げ出した。箱は重ねられた本に当たって跳ね返り、机の端で止まる。

こいつは、広澤にと、彼女が買ったチョコ。

箱をもう一度掴み、啓史はゴミ箱に放り込もうとして……ためらった。

でもこいつは、沙帆子の手から直接取り上げて……現実には、俺がもらったことになっ  
てるんだよな？

どんな形であれ、啓史に渡ったこのチョコが捨てられたなんて、彼女にすればいい気分じゃないだろう。

啓史はチョコの箱を見つめ、仕方なくもとの場所に収めた。

あー馬鹿か、俺は……

啓史はソファに転がり、組んだ両手に頭を乗せて、天井を見つめた。

ポケットの中で着信音が鳴り、彼はうざったい気分でも携帯を取り出した。表示を確かめて驚く。

沙帆子……から？

彼女が啓史に電話をかけてくるなんて、すぐには信じられなかった。

目を見張っていた啓史は、気を取り直して身を起こし、携帯を耳に当て、「はい」と口にした。緊張して、どうにも声が強張ってしまう。

「ああ、啓史君。わたし、美美子ですー」

やたら明るい、パワーのある声に、啓史は面食らった。美美子という……？

「榎原のお母さんですか？」

「そうそう」

自分が誰なのか、啓史がわかったことが嬉しかったのか、声がさらに明るさを増す。

「土曜日のことなんだけど、わたしたち十時には出発する予定なのね。だから、啓史君、沙帆子のこと九時半には迎えに来てちょうだいね」

啓史は眉を寄せた。この、量みかけるような言葉の意味がまったくわからない。だが、沙帆子の母親は、彼がすべて理解していると思込んでいるようだった。

土曜日……十時に出発？ 九時半に……なんだって？

「あ、あのねっ、マ、ママ」

「帰りは日曜日の夜」

焦りまくった沙帆子の声が聞こえたものの、美美子が再び語り始めたので、啓史はさらに意識を集中した。

「時間ははっきりしないけど、また電話で連絡取り合えばいいわね」

日曜の夜？ 誰が帰るって？

「代わって、ママ、代わって」

慌てふためいた沙帆子の声。

「もう、まだ話があるのよ。あとで代わるから、もうちょっと待ちなさい」

どこか叩かれてもしたのか、ペシンという音と、「はふっ」という、沙帆子のものらしいおかしな声が聞こえた。

「初めてのお泊まりだから、女親のわたしとしては力が入っちゃって」

初めてのオトマリ? ……オトマリってなんだ?

「もう、すごい可愛いお泊まりセット揃えたの。啓史君、楽しみにしててね」  
オトマリセット?

何を言われているのか、さっぱりわからない。

「それから、ひとつ真面目な話」

美美子の声が、いやに改まったものになり、啓史は眉をひそめた。

「なんででしょうか?」

「すぐに結婚するんだとしても、やっぱり、高校は普通に卒業させたいし」

結婚……

やはり、結婚の話は……まだ……

驚きが再び湧き上がる。

「そこどころ、間違いないように気を引き締めてちょうだい」

まるで理解できていないのに、どんどん話が進んでゆく。啓史は内心首を傾げていたが、答えを要求されているのを感じ、「わかりました」と答えていた。

「買い置きを使いかけもあるだろうけど、そんなの捨てて、これからは、わたしが持てるいいやつ使ってちょうだいね」

その言葉を聞いた瞬間、先ほどは理解できなかったオトマリという言葉が、彼の頭の

中で一瞬にして意味を成した。

お泊まり?

お泊まりだあ?!

胸にどんと衝撃を受け、啓史は頭の中で叫んだ。

誰がどこに泊まるんだって?!

ま、まさかと思うが……泊まるってのか? 俺んとこに……沙帆子が?  
本気でお泊まりさせるつもりなのか? ……マジかよ?

鈍い痛みを感じ、啓史は頭を抱えた。どうやら、とんでもない誤解があるようだ。まづ間違いなく、沙帆子の両親は……沙帆子と啓史の付き合いの深さを誤解している。

「ママ、これ……?」

「そう、それ」

何がこれで、そうそれなのだ!?

「それとね。沙帆子、明日からお弁当作ってくって、もうすごい張り切ってるわよ」

「弁当を、俺にですか?」

驚きとともに口にしたものの、張り切ってるという言葉は、信じられない。あんな風に、気まずい状態で、ここから帰らせてしまったのに……

「もっちらんよお。夫のあなたに作らず、誰に作ってゆくとこのよお」

お、夫……

ぎよつとさせられた啓史は、心の中で疲れたため息をついた。沙帆子の母には、ついでゆけそうもない。

「わたしはどうまくなけれど、沙帆子の愛情たつぷりよ。食べてあげてねん。……それじゃ、沙帆子に代わるわね」

芙美子の言葉のあとは、しーんと静まったまま、何も聞こえてこない。しばし待ったところでようやく、「あ、あのお……」という、盛大に気まずそうな声が聞こえてきた。

「いったい……どうということかな？」

散々困惑させられたツケを払わせたくて、啓史は皮肉をたつぷり混ぜ、やわらかに聞かかけた。

## 6 やっかいな友

「あ、あの、父と母がですね。つ、つ、つまり、そのですね」

「榎原、必要な言葉だけ口にしろ！」

うわずった口調で、意味のない言葉を羅列られいするばかりの沙帆子さほこを、啓史は思わず怒鳴

りつけた。

「す、すみません」

「まず、今度の土日、お前の両親はどこに行くって？」

「それが、引越し先のところに行つて、向こうで住む家とか探すつてことになりまして……」

「それで、お前は？」

答えはすでに知っているが、啓史はあえて聞いた。

「わ、わたし……はそのお……」

「俺のところに泊まりに来るつてのかわ？」

「そう……いう……こと……です」

ひどく言いにくそうに彼女は言う。

「どうやら、お泊まり話は……現実のことらしい。どうにも信じられない話だが……」

「お前……」

「は、はいっ」

「予定があつたんじゃなかったのか？」

「はい？ え、えつと、ですから、母が佐原先生のところにお泊まりに行けと……そんなの厚かましすぎると、もちろんわたしは思ったんですけど……」

「それが言いたかったのか？」

「えっ？」

「さっき、ここで、言いづらそうにしたのは、このことか？」

「すみません。ほんと、とんでもないことですよね……」

申し訳なさそうに言う沙帆子に、口元が緩む。啓史の心から、重みが消えた。

週末の彼の誘いを、彼女は断ろうとしていたわけではなかったのだ。

「なんだ、そうか」

安堵すると同時に罪悪感に駆られる。勝手に断られたと思って、苛立ちをぶつけてしまふなんて……

「あ、あの？」

「悪かったな。さっき、ひどい言い方して」

「えっ？」

「ひとつ聞きたいことがあったんだ」

謝罪を口にした照れと気まずさを早く消してしまいたくて、啓史は急いで話題を変えた。

「お前、あのとき、どこからやってきた？」

「あのとき？」

「広澤と江藤が話していたときだ。突然ひよこひよこやってきたから、驚いたぞ」

「物理室の窓から抜け出したんです」

「ああ、そうか。考えたな」

疑問が解け、すっきりした。そのあと沙帆子は、抜け出した物理室の窓の鍵を閉めておいてくれと頼んできた。もちろん、そのくらい造作もない。啓史は機嫌よく沙帆子の頼みを請け負ってやることにした。

そんなことより……

「弁当を作ってきてくれるんだって？」

「は、はい。なんかそのようなことに……ご迷惑でなければ作らせていただきます」  
胸に嬉しさが膨らんだ。

「ふん。……窓の鍵、確かめといてやるよ」

「あっ、はい。よろしくお願いします」

地べたに這いつくばっていたのが、天へと上がってゆく気分だった。幸運の女神は、まだまだ彼の味方をしてくれるつもりらしい。

その後、テレビゲームのボクシングの話で、ふたりの会話はこれまでになく盛り上がった。

通話を終える前に、明日の朝、三十分早く学校に来ることを約束させたが、それをさっ

かけに、沙帆子がくぐってきた垣根の穴のことに話が及び、彼は声を上げて笑った。沙帆子のほうも、不服そうにしながらも楽しんでいるのが伝わってくる。

だが、自分かららしくないほどテンションを上げていることに気づいた途端、気まずくなり、啓史はそそくさと笑いを収めて通話を終えた。

明日は、あいつの手作りの弁当が食べられるのか？

閉じた携帯をポケットに戻し、喜びを嘸み締めていた啓史は、空腹を感じて顔をしかめた。

考えたら、今日の食事は、昼の中身のパンが三個だけ……

さすがに、腹が減ったな……

立ち上がって白衣を脱ぎ捨てた啓史は、鞆を掴むと、急いで部屋から出た。

そうだ。物理室の窓だったな……

物理室の横を、そのまま素通りしようとしていた啓史は、沙帆子との約束を思い出し、足を止めた。別に、物理室の窓が一つ開いているくらいのこと、どうということはないと思うのだが、引き受けた以上、確かめないわけにはゆかないだろう。

あの教諭、いま部屋にいないだろうか？

物理の教諭は啓史よりふたつ年上だが、気が合いそうもないし、啓史が迷惑している

バケ子女史に好意を寄せている。そのせいで、恋敵<sup>こいがき</sup>扱いされるし……彼にすれば、まったくいい迷惑だった。

啓史は物理教諭の個室のドアに近寄り、物音がしないかと耳を澄ました。何を言っているかはわからないが、微かに声<sup>こゑ</sup>が聞こえる。電話でもしているのか？

啓史は顔をしかめた。いるんじゃ、物理室には入ってゆけないな。物音を聞きつけてやってこれでもしたら……顔を合わせて、なんと説明する？

まあ、鍵なんて別にそのままでもいいだろ……確認して、すでに閉めたあとかもしれないしな。

そう結論を出して、その場から立ち去ろうとしたとき、部屋の中から潜めた笑い声が聞こえ、啓史はぎょっとした。

女だ……この声？ ……もしやバケ子女史か？

啓史は、急いでその場から離れた。

はつきりしないが、どうもあの声は、バケ子女史だった気がする。

あのふたりがくつついたのなら、啓史にすれば、ありがたいことなのだが……車に乗り込み、ほっとした気分<sup>こころ</sup>で笑みを零した啓史は、きゅっと眉を上げた。すきつ腹が、いい加減にしるよと叫んでいる。

まずは腹ごしらえだな……